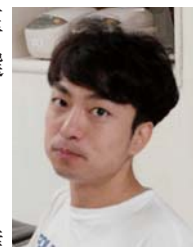


医燈会によせて

医学部6年 植村 和平 (北海道40期)

同窓会報誌は毎回チェックして先輩方の活躍を楽しみに読んでいたので、いつか自治医科大学に貢献できるきっかけがあればと常日頃考えていましたので、この度は医燈会を選択して頂き、まことに嬉しく思っています。



本題の医燈会をどのように考えついたか記したいと思います。

まず私の最初に考えていたのは、この自治医大の“医療の谷間に火を灯す”という言葉です。この言葉は自治医大を体現する言葉であり、自治医大出身医師の根源だと思っています。この在学の間に卒業生以外の方に自治医大生卒業生は優秀だというお話をよく聞きます。それに加え直接お会いして仕事ぶりを目の当たりにすると、この僻地という谷間に孤軍奮闘で医を灯し続けるということを経て非常に熱い思いを持つのだと感じるのです。このような優秀すぎる先輩方が沢山いらっしゃることは、同じ大学の一後輩としては大変にプレッシャーで困るのですが、卒業して楽な方へ流されそうな時はこの会報誌を見るたびに奮起できるよう、先輩方が灯し続けている灯の重みを感じるためこの文言に繋がる言葉になればいいなと思いました。

次にこの学校のシンボルというものも意味合いに込めたいと考えました。

私は40期で平成4年生まれ、いわゆる若者にまだ所属させてもらっているのですが、その若者の例にもれずSNSを好んでやっております。特にFacebookは実名登録ということもあり、先生方と形上の友達にならせて頂き、おかげで先生方の投稿を見ることができ楽しみにさせているのですが、その中ではっと驚くものがありました。それは自治医大の寮から大学病院に続く道沿いの風景の写真ですが、皆さんこんな立派に銀杏の木が茂らせていることをご存知だったのでしょうか？

私は写真で見るとこんな綺麗に茂っているとは気づきませんでした。この銀杏の木はまだ樹齢も若いと思います。しかしそれはこの自治医大も同じく45才のこれからより発展することを考慮すればまだまだ歴史の浅い段階という点で似た部分があると思います。この自治医大が歴史を積み重ねる毎に銀杏も大きく成長し、いつしか銀杏が自治の風物詩の一つだと思える時代が到来するよう両方の成長を掛け“いちよう”とよみました。

最後に医燈という語源について。

私はダンスで大会に出る上で大事にしている部分があります。それはレペゼン栃木という気持ちを忘れないことです。このレペゼンという言葉はダンス界でよく使われる表現なのですがRepresentを早口でいったもので、～を代表するという意味合いで使われます。幸運なことに医学部スポーツ・文化功労賞頂く程度の結果を残すことができたのですが、ここまで来たのは栃木のダンスシーンに育てられたからと思うばかりです。

それは勉学の面でも同様であり、今まで医学を学ばせてもらった栃木には本当に親しみ感じています。残り1年を切って栃木を離れることが現実に近づいて来ると本当に寂しい思いがしています。そんなレペゼン栃木として、同窓会の名前を考える上で、この大学に入学するまでは知ることなかった栃木にゆかりのある意味も込めたいと考えました。日本最古の学校として知られている足利学校は、1439年～1872年の約400年の間も学問の灯をともし続けていて、医学を学ぶ学校でもありました。そこで同様にこの栃木の足利学校で医学を学び、そして様々な著書を残し世に医学をともした曲直瀬道三を栃木出身の大先輩として尊敬を持って、その著書の一つ「医燈藍墨」にあやかり、この同窓会の愛称の由来として最後に込めて締めさせて頂きました。

まだ、学生の身で学ぶことが多く至らない点が多々あると思います、その際は是非植村（m11010wu@jichi.ac.jp）までご指導のほどよろしくお願ひします。

同窓会報誌に挨拶文を掲載する機会を与えてくださった同窓会白亜社の皆さん本当にありがとうございました。

参考文献

近世日本の医学にみる「学び」の展開

町 泉寿郎

これは私がいつも非常に楽しみにしている脳外科の黒先生の記事の写真で、今回お願ひして使わせてもらったものです。

